雪椿通信

SPRING & SUMMER 2020

vol. 53

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

鏑木清方〈桜姫〉1923年　当館蔵
©Akio Nemoto

コレクション展示室より

今年度のコレクション展ラインナップから個展形式の3つの展示をご紹介します。

田畑あきら子　火だるまのなかの白い道

会期：6月23日(火)～10月4日(日)

今年1月、東京都現代美術館の展覧会で、詩人・吉増剛造の「大草稿」の中に田畑あきら子の名前を見つけました。それが書かれた日付を見ると、2019年8月28日、29日。田畑あきら子が1969年8月27日に亡くなってから50年、節目の夏の日に書かれたもののようでした。

さて、田畑あきら子が残したわずかな作品のほとんどは、彼女が亡くなって間もない頃に、当館の前身、新潟県美術博物館にまとめて寄贈されました。美大を卒業して間もない、たった一度個展を開いただけの駆け出しの画家に過ぎなかった彼女の作品が、このように収蔵されるのはほとんど奇跡のことのように思われます。それは、あきら子の作品に感銘を受けた画家・木下晋が橋渡しとなって実現したことでした。木下はその後、「気まぐれ美術館」の洲之内徹に紹介し、田畑あきら子の名前が広く知られるきっかけも作っています。彼女の作品は木下をはじめ、彼女と彼女の作品に

田畑あきら子〈作品〉1966-67年　当館蔵

惚れこんだ人々によって、大切に語り伝えられてきたのです。吉増剛造も、その役割を担ってきた一人でした。

詩人でもあった田畑あきら子の作品には、ときに言葉や記号が描き込まれ、独自の絵画空間が広がります。今もなお人々を魅了して止まない、あきら子の作品をご堪能ください。

（美術学芸員　松本奈穂子）

生誕110年 佐藤哲三と蒲原の画家達

会期：10月13日(火)～12月20日(日)

蒲原に育った洋画家、佐藤哲三（1910－1954）は、若くして画家を志し、昭和2年（1927）大調和展での落選を契機に梅原龍三郎と出会い、以降、知遇を得ました。しかし、梅原にその後を嘱望されながらも、上京して学ぶことをせず、郷土蒲原に留まり、農村社会とそこに生きる人間をテーマに描き続けました。哲三の作品には、自分を育てた蒲原の大地、そして厳しい環境や状況の中で一生懸命に生きる農婦や地元の人達に温かい眼差しが注がれ、郷土愛に満ち溢れています。

本年は、この哲三の生誕110年に当たります。それを記念して、当館が所蔵する全23点の哲三作品により顧みたいと思います。併せて兄・重義の作品をはじめ、互いに影響しあった富樫寅平、長谷川武雄、末松正樹ら、蒲原の仲間達の同時代の所蔵作品も展示し、蒲原の美術状況の一端もご覧いただきます。

（専門学芸員　松矢国憲）

佐藤哲三〈帰路〉1954年　当館蔵

中村忠二　詩情と激情

会期：10月13日(火)～12月20日(日)

2005年に実業家・相沢直人氏より、当館に一括寄贈された相澤コレクションの中に中村忠二の作品がおよそ50点含まれています。忠二は現在の兵庫県姫路市に生まれ、1915年、大阪で電信通信手としての職を得ますが、この頃より美術に興味を持ち、1919年20歳の時に上京します。念願の日本美術学校に入学しますが、学費が払えず翌年退学、以降、各地を転々としながら、水彩画連盟や光風会、国画会に出品を続け、美術作家として独自の地位を確立した作家です。晩年の20年間を練馬区内で過ごしたことから、2018年６月「生誕120年　オオイナルシュウネン　中村忠二展」が練馬区立美術館で開催されました。

忠二の代表的な仕事の1つにモノタイプがあります。版画の技法の1つで、60歳の時に知り合いの画家・水波博から教わったようです。ガラスや金属板に直接着色しそれを紙に転写する技法のため、一般的な版画のようにたくさん刷ることはできません。しかし、通常の版画にはない荒々しい表現ができることもあり、忠二は独学で研究を続け、味わい深い作品を次々と生みだしていきました。

今回の展示では「詩情と激情」と題して、激しい筆致ながらも叙情性豊かな、忠二の独特な世界をモノタイプ作品を中心に紹介します。

（学芸課長　藤田裕彦）

中村忠二〈崖シリーズNo.5「死」〉1966年　当館蔵

館長所感

「アレッ、近美さん、どうしたの？」―こうした声が聞こえてきそうです。本年度の企画展のスケジュールが決まりました。4月の「サンダーソンアーカイブ ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」を皮切りに3本を開催する予定です。いつもより1本少ない上に、3本目の「Viva Video！久保田成子展」は来年3月下旬の開催予定です。2本目の「三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA」展（7–9月予定）が終了してからおよそ半年のインターバルがあるものですから、違和感を持つ方もおられるでしょう。県の緊縮財政を反映して年間の企画展2–3本、という変則的な形が何年か続くかもしれません。

本年度もバラエティに富んだ企画展となりました。ウィリアム・モリス展は、人々を魅了するデザインの中から壁紙を中心に紹介します。「生活の中に美を」と提唱した近代デザインの先駆者モリス。自然の草花をモチーフにした作品は見る者の心を癒してくれます。三沢厚彦展では、様々な動物をモチーフに樟を等身大に彫り出した木彫が圧倒的な存在感で迫ります。長岡展では国内初の新作が登場します。ご期待ください。

3本目は、本県が生んだ著名な国際的アーティスト・久保田成子（旧巻町生まれ）のすぐれた業績を、郷土の美術館として広く顕彰するものです。久保田は映像と彫刻を組み合わせたヴィデオ彫刻という新しい境地に挑み、独創性と先駆性で高い評価を得た作家です。現代アートの魅力を堪能して頂きたいと考えています。展覧会は当館開催後、多くのファンが待つ大阪市の国立国際美術館、東京都現代美術館を巡回します。

企画展は若干少なくなりましたが、年間を通してご覧いただいているコレクション展は充実のラインナップ。第1期から第4期までいずれも秀作、名品ぞろいです。皆さんのご来場をお待ちしています。

（館長　木村哲郎）

鏑木清方〈桜姫〉
1923（大正12）年
絹本彩色　当館蔵
©Akio Nemoto

表紙の作品

やわらかな薄紅色の美しい桜模様のきものを身につけながらも、描かれた女性の顔は苦痛にゆがみ、裸足で身を大きくくねらせています。本作は芝居好きの作者鏑木清方が歌舞伎「桜姫東文章」を題材にして描いた作品です。

桜姫は良家の姫の身でありながら、数奇な運命に弄（もてあそ）ばれ、女郎にまで身を落とします。上等なきものや豪華な錦繻子（ぎょくすんし）、だらりに結んだ帯は生まれのよい姫であることを表します。その一方で襦袢は鮮やかな赤い色をしており、物語の核心ともいえる愛欲の強さを思わせるとともに、画面を引き締める役割も果たしています。絵絹の裏には金箔が押され（裏箔）、異常な桜姫の境遇を暗示しています。歌舞伎好きで女性の装いにも敏感な清方ならではの表現です。

（専門学芸員　宮下東子）

編集部からのひとこと

遅ればせながら、当館でもようやくツイッターを始めました。SNS 初心者のため、試行錯誤しながら更新しています。ただいまフォロワー大募集中！ぜひフォローをお願いします。
@ niigata_kinbi

（美術学芸員　松本奈穂子）

新潟県立近代美術館だより　雪椿通信　第53号
編集・発行　THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111㈹　FAX0258-28-4115
https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/
公式ツイッター　@niigata_kinbi
制作・印刷　株式会社 山田写真製版所
〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14
リデザイン　長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大
発 行 日　2020年4月22日

特集1

三沢厚彦　ANIMALS IN NAGAOKA

「三沢厚彦　ANIMALS IN NAGAOKA」が
いよいよこの夏、開催されます。
三沢厚彦さんについて、展覧会について、
その魅力や見所などを紹介します。

三沢厚彦《Animal 2018-01》2018年
樟、油彩　撮影：大沼ショージ

三沢厚彦さん

2020年2月、自宅兼アトリエにて。

三沢厚彦さん（1961-　）は京都市生まれ。幼い頃より京都や奈良の古刹を度々訪れ、美術書や画集を通し木彫の魅力にふれ、小学生の卒業アルバムには「彫刻家になりたい」と記します。高校、大学で彫刻を学び、東京藝術大学大学院を修了。一方で、若いうちからロックやジャズ、ポップミュージックにも親しみ、美術同様音楽に対する造詣も深めていきます。

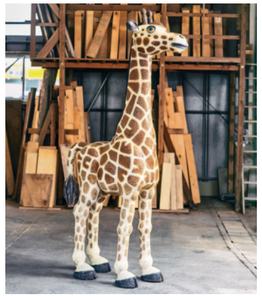
2000年からは「アニマルズ」シリーズの制作を始めます。2001年にはこのシリーズにより第20回平櫛田中賞を受賞し、評価を確立。多数のグループ展やアートイベントに参加すると共に、全国の美術館で「アニマルズ」展を開催。各地で好評を博し、現在に至ります。2019年には《Animal 2018-01》が第41回中原悌二郎賞を受賞。現在の日本を代表する彫刻家のひとりです。

アニマルズ

見れば見るほど不思議な「アニマルズ」。よく知った動物の姿をしているようで、どこか違うような印象を与え、見る者を惹き付けます。

三沢さんは、大学院修了後はコンセプチュアルな作品等を制作していましたが、やがて「木を彫りたい」という素朴な欲求から、動物の全身像をつくるようになっていました。「動物はみんなが知っているモチーフであると同時にその不可解さもはかりしれないものがありそこが面白い」と、動物の魅力について語る三沢さん。「アニマルズ」のモチーフは多岐に渡りますが、いずれも実際の動物を写実的に表現しようとはしていません。この不思議な動物たちは、素材と向き合う中、三沢さんの自由な想像により生み出されます。再現に依らず、けれども作品たちがリアリティをもって迫ってくるのは、三沢さんの捉える動物の「らしさ」が独自の表現で形づくられ、強烈な印象を放つからなのかもしれません。

「アニマルズ」に対峙したときに何を思うのか、何を感じるのか。実物との出会いが楽しみになってきませんか？



三沢厚彦《Animal 2008-02》2008年 樟、油彩　撮影：内田芳孝

作品は、どうやってつくられている？

彫刻作品「アニマルズ」の素材となるのが、樟（クスノキ）という木材です。仏像などにも用いられる、加工のしやすい木材で、独特の芳香を放ちます。

三沢さんは、大型作品の制作は、神奈川県内にある製材所内のアトリエで行っています。はじめにスケッチをすることもあれば、つくりながら考えることもあるそう。動物の多様な姿にあわせて寄木をし、墨で下描きを入れて電動チェーンソー等で大まかな形を彫り出していきます。その後の細かい部分は、鑿（のみ）を使って、彫り進めていきます。

着彩は油絵具で行われ、鑿跡と合わさり、特徴的な質感を生み出します。着彩後に、また彫り進めることもあり、納得がいくまで作業を繰り返していきます。

長い道のりを経て完成する「アニマルズ」。制作にかける「時」も伝わってくるかのようです。

上：制作途中の
《Animal 2018-01》。
まだ角が無いですね。
下：鑿跡がよくわかります。
下描きの線も残っています。

新潟（長岡）展準備中

「彫刻作品はアトリエで完成を迎える。そして展示することにより、もうひとつの完成を迎える」―。三沢さんは全国の美術館で「アニマルズ」展を開催してきましたが、彫刻作品と展示空間との関係性を重視し、会場ごとに異なる展示プランを展開してきました。

三沢厚彦《Animal 2016-01》
2016年 樟、油彩　撮影：三沢厚彦

現在、新潟（長岡）展開催にあたり、三沢さんと何度も打ち合わせをしながら、展示プランを練っているところです。今回の展覧会では、およそ100点の彫刻や絵画を複数の区画に分けて紹介。代表作《Animal 2018-01》（麒麟）のほか、夏の開催に相応しく（？）《Fish 2015-01》（サメ）、また当館会場で初登場となる新作も展示される予定です。これらの作品が会場の空間とどう結びつくのでしょうか。

また今回、同時開催するコレクション展「近代美術館の名品」では、アニマルズと三沢さんの個人コレクションを当館の所蔵品とともに特別展示します。三沢さんの感性が垣間見えるこちらのコラボレーションも見逃せない内容になるでしょう。

新潟県立近代美術館全体の空間で、展開される「三沢ワールド」に、ぜひご期待ください。

（主任学芸員　伊澤朋美）

三沢厚彦《Fish 2015-01》
2015年 樟、油彩　撮影：三沢厚彦

三沢厚彦《春の祭典》2016年 パネル、アクリル、色鉛筆　撮影：高橋健治

©Atsuhiko Misawa, Courtesy of Nishimura Gallery

企画展
「三沢厚彦　ANIMALS IN NAGAOKA」
7月4日(土)～9月6日(日)

同時開催　第2期コレクション展　6月23日（火）～10月4日（日）
［展示室1・2］　近代美術館の名品
※9/6まで一部三沢厚彦展関連展示になります

企画展
「Viva Video！ 久保田成子展」
2021年3月20日(土)～6月6日(日)　※予定

三沢厚彦《Animal 2009-02》
2009年 樟、油彩　撮影：三沢厚彦

特集2

久保田成子

―新潟生まれの不屈のアーティスト

新潟出身のヴィデオ・アーティスト、久保田成子（1937-2015）をご存知でしょうか。2015年の新潟日報の連載「人ものがたり」をご覧になった方は覚えていらっしゃるかも知れませんが、新潟ではこれまで作品に接する機会に恵まれず、その名前すら知る人は多くないのが実状です。しかし、ニューヨークを拠点に欧米各地で作品を発表し、ドイツで4年に1度開催される現代美術の国際展ドクメンタに招待出品するなど、1970年代後半からその活動は国際的に評価されていました。

そもそも、久保田成子はなぜアメリカに渡ったのでしょうか？それは、1963年に東京の内科画廊で開催された個展に対する批評が一つも出なかったことに落胆したためと、作家本人が語っています。高校時代まで新潟県内で過ごした久保田成子は、東京教育大学（現・筑波大学）に進学後、叔母で前衛舞踊家であった邦千谷の影響もあり、前衛的な芸術表現に強い関心を抱きます。1960年代前半は、オノ・ヨーコやジョン・ケージが草月会館で公演を行い、読売アンデパンダン展や路上でもパフォーマンスが盛んに行われるなど、前衛美術の全盛期でした。そんな中、自らの作品にまったく関心を示さない日本の美術界に愛想を尽かし、オノ・ヨーコを介して交流をもったフルクサスの代表ジョージ・マチューナスの誘いで、1964年の夏にニューヨークへ渡ることを決意します。これが彼女の芸術家人生の真の始まりでした。

渡米直後は、フルクサスに典型的なマルチプル作品やパフォーマンスによる表現活動を行っていましたが、1970年頃からは映像を作品に取り入れ始め、76年の個展で発表した連作「デュシャンビアナ」で一躍注目を集める存在となりました。

1

「デュシャンビアナ」はマルセル・デュシャンとの邂逅から生まれたシリーズで、立体作品であると同時に彼女が撮影した映像が重要な構成要素として組み込まれており、ヴィデオという最先端のメディアと彫刻が見事に融合した造形作品です。同シリーズを発表した1976年の個展に際し、画廊主のルネ・ブロックがそれらを称した「ヴィデオ彫刻」という言葉は、彼女の作品の代名詞となります。そして、《デュシャンビアナ：階段を降りるヌード》（1976）はヴィデオ・インスタレーションとして初めてニューヨーク近代美術館に収蔵された、美術史上記念碑的な作品となりました。

その後、1991-92年にアメリカ、ドイツ、日本を国際巡回する個展が開催され、95年には外国人として初めてマヤ・デレン賞を受賞するなど、久保田成子の評価は決定的なものとなります。しかし、夫のナムジュン・パイクが1996年に脳梗塞で左半身に麻痺を負ってからはそのサポートにすべての時間を捧げ、彼の死後は自身も闘病を続ける過酷な状況の中で、最愛の夫をテーマに最後の連作《ナムジュン・パイク》（2007）を制作しました。その壮絶な人生と作品を紹介する公立美術館で初めての大回顧展は、当館を皮切りに新潟・大阪・東京の3都市で開催の予定です。展覧会をご覧になる前に、共著である『私の愛、ナムジュン・パイク』（2013年、平凡社）もぜひご一読ください！

（主任学芸員　濱田真由美）

2

1. 久保田成子と《ヴィデオ・ポエム》（1968-76）
Mary Lucier ©1975
2. 久保田成子《デュシャンビアナ：階段を降りるヌード》1976年
ニューヨーク近代美術館蔵